



Special Feature

ヤマダイノ
ミライ



cover story

[今月の表紙]

吉田地区にある総合図書館のペランダから眺めると、農学部の背後にひときわ高く、美しい外観の建物が目に入ります。2015年4月に設立され、国際水準の獣医学教育と高度な研究を推し進めていくiCOVER※です。この季節は紅葉の並木が美しく、勉強の合間の休憩にはもってこいの風景です。ここに山口大学が移転した1966年からある農学部とiCOVERの並ぶ“ヤマダイノミライ”的景色は、過去からつながる「ヤマダイノミライ」を感じることができます。

※iCOVER:山口大学共同獣医学部
附属獣医学国際教育研究センター



YU-INFORMATION
No.125
山口大学広報誌

contents

02

今月の特集

ヤマダイノミライ

03 教育学部 05 医学部 07 工学部 09 共同獣医学部
11 國際総合科学部

|3 平成28年度組織再編「新しい山口大学のこれから」

|5 What's New? YU-PRSS

|6 EVENT SCHEDULE

文責：株式会社 無限

Special Feature

ヤマダイ
ノ
ミライ



01

Shigematsu Hirotake



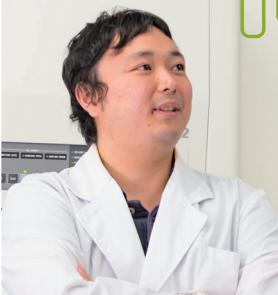
02

Suehiro Yutaka



03

Mikami Masato



04

Shimoda Hiroshi



05

Kimura Tomohisa

Future

創基200周年を迎えた山口大学は次の100年を見据えています。「真理」を探求し続ける「イマ」から、デザイン科学を基盤に「ミライ」を探す歩みを始めました。今回特集で取り上げる教育学部、医学部、工学部、共同獣医学部そして国際総合科学部は、「ヤマダイノミライ」にあるべきものを見つけていきます。世界へ広がる成果の一端を紹介します。

- P11 > Faculty of Global and Science Studies
- P09 > Joint Faculty Veterinary Medicine
- P07 > Faculty of Engineering
- P05 > Faculty of Medicine and Health Sciences
- P03 > Faculty of Education

基礎と応用を融合した 教育の新たな可能性。

教育学部 理科教育講座(物理学)准教授
重松 宏武 Shigematsu Hirotake

Profile

1991年 山口大学理学部物理学科 卒業
 1993年 同大大学院 理学研究科修士課程(物理学専攻)修了
 1995年 筑波大学大学院 工学研究科博士課程(物理工学専攻)
 単位修得退学
 1996年 博士(工学)(筑波大学)
 1995年～名古屋大学工学部助手
 2002年～島根大学教育学部 理科教育講座 助教授
 2009年より現職



教材開発力や活用力 理科教育に関する実

基礎から応用、そして教育の道へ

物理学を学びたいと思ったきっかけは、高校の物理の授業で、日常のあらゆる現象が数式で定量的に表わされることに、驚きと感動を感じたからです。物理学を学ぶことで、物事の真理を探ってみたいという思いから、山口大学の理学部物理学科に入学しました。物理学科の研究室は、実験系と理論系の2つに大きく分かれます。当初は、理論系に進みたいと考えていましたが、大学で学ぶ理論物理は私にとってはイメージ化しにくく、一方で、目に見えて結果が出る実験系に面白みを感じました。

学生時代は、結晶の相転移について調べていました。これは、温度が変わると物体がどのように変化するのかを、試料にX線や中性子、放射光を照射してミクロ的に解析するものです。中でも、原子レベルの結晶構造とその揺らぎが解析できる中性子回折・散乱測定^{※1}に興味を感じました。そこから発展して、大型の放射光研究施設や研究用原子炉などの装置を使った中性子回折・散乱実験を行い、相転移の前駆現象^{※2}を調べていました。その後、原子炉材料やリチウムイオン導電体などの機能性材料の開発に携わったことから、基礎的な研究からものづくりに役立つ応用研究へと視点が変化していきました。

キャリアアップの一環としてたどりついたのが教育学部です。教育というとHow to中心に思われるがちですが、実は、教育現場においても基礎と応用という2つの視点が必要です。遠回りをしたもの、これまでの経験は全て生かされています。オールラウンドプレーヤーだからこそ、伝えられるものがあると感じています。

相転移機構の解明

温度や圧力などの変化によって、物質の状態(相)が別の異なる状態へと変化する現象を相転移といいます。水が氷に、あるいは水が水蒸気になる現象は、相転移の典型的な例です。

私の現在の研究対象は、誘電体における固体から固体への相転移です。相転移の機構は、「変位型」と「秩序・無秩序型」の2つの型に大別されます。この2つには基本的に個別の概念

の向上を目指した 践的研究

山口大学教育学部の詳細はここでCHECK! >>> <http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/>



がありますが、両者を統一的に解釈できないだろうかという観点から、X線や中性子などを用いて実験し検討しています。

もう一つ、仮想相転移についても研究しています。仮想相転移とは、数式により仮定した仮想的な相転移です。中でも、絶対零度以下に想定されている仮想変位型相転移の前駆現象に注目しています。どうして前駆現象が起きたのか、目には見えないものを解明するために、さまざまな条件を変えて実験を行っています。

基礎と応用を兼ねた教材開発で クリエイティブスキルを磨く

私が所属する教育学部理科教育講座では、将来、中学・高校理科の教員、理科に関して高い指導能力をもつ小学校教員を目指す学生の教員養成を行っています。

理科教員にとって、授業で活用するための教材作りや作製技術のスキルアップは重要な課題の一つです。そこで、講義とは別に教材開発にも力を注いでいます。原理・原則を理解すれば、身近な材料や機械を組み合わせて適切な装置を作ることが可能です。しかし、原理・原則を知っていても、それをどの場面で使うのかは、実際に物を作つなければ分かりません。さらに、装置を使う場合は、物理学的な動作原理を理解していかなければなりません。つまり、基礎と応用の両方の要素が必要不可欠なのです。

既製品をアレンジするものもあれば、一から作るものもあります。旋盤やボール盤などを使った機械加工まで、全て自分たちで行います。学生との距離感を大切にしているので、手取り足取り教えることはしません。ただし、私も同じ教材を作つてお手本として並べておきます。より伝わりやすくするために、丁寧に作るのをポリシーです。美しく見せるため、完

成度には徹底してこだわります。

研究室で使用するための実験装置も開発しています。装置には、いつ誰が作ったのかが分かるように、開発者である学生の名前と日付を入れたシールを貼ります。そうすると、下手な装置は作れないという責

任感が生まれます。こうしたものづくりは、教育学部の縦のつながりを認識するコミュニケーションツールとしても役立っています。

次世代に知を広げる

科学の楽しさを子どもたちにも広めたいという思いから、小・中・高校生を対象とした出前講義や科学館での科学教室などを行っています。また、市民向けの講演も開催し、知識の普及に力を入れています。

“理科離れ”が叫ばれていますが、将来のエネルギー事情を考えると、省エネ商品や次世代エネルギーなど、新しい技術で新しい製品を作ることはこの先も必ずです。未来を支える子どもたちに向けて、ものづくりの楽しさやエネルギー環境の重要性について、伝えていきたいと考えています。

物事の真実や真理を捉えるのがサイエンスです。物事に対して疑問を持ち、論理的に考え、真実を見抜く。そうした力は、自然科学だけでなく、人文科学、社会科学においても必要な力です。ですから、文系、理系に関係なく、全ての物事はサイエンスと捉えることができます。

理科は学ぶためのきっかけにすぎません。社会で必要とされる力は、理系・文系の枠に収まりません。理系でも文章力や英語力は必要ですし、文系でも自然に対する理解は必要です。理系だから、文系だからといった狭い考え方ではなく、

幅広い世界に

目を向けることが大切だと思います。

知的向上のための努力を！

教育において答えは一つだけとは限りません。正解がないため、この方法で良いのだと自己満足に陥りがちです。でも、評価は他人がするもの。だからこそ、周りの声に耳を傾ける謙虚な姿勢が必要だと感じます。

科学が発達するにつれて、真が疑になったり、疑が真になったりすることがあります。情報が氾濫しているため、本当に正しい答えを知らずして指導している教員もたくさんいます。例えば、磁石につくものとして鉄やコバルト、ニッケルなどがあります。でも、小学校の段階では、磁石につくものは鉄だと教える。ですから、児童は答えが一つしかないのだと間違って理解してしまいます。教員を目指す学生の皆さんには、物事の本質や真理を理解した上で、将来、教育者として活躍してほしいと思っています。

また、理科の先生だからといって、理科しか分からぬのでは困ります。少なくとも関連教科の二つ、三つについて深い知識を持っておいてほしいですね。

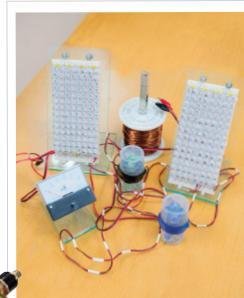
社会人になると日々の仕事に追われて、どうしても自分の時間が削られてしまいます。だから、大学時代にたくさんの経験を積み、多くのことを吸収してほしい。できれば海外に行つて、さまざまな人や文化に出会い、いろいろな価値観に触れてほしいと思います。学びの本質は主体性にあります。何を学ぶのかは、学生の皆さんのが考えるべきことです。常に貪欲に学ぶ姿勢を忘れないでほしいですね。

※1 中性子回折・散乱測定：中性子線の回折・散乱現象を利用して、物質の結晶構造やその揺らぎの解析を行う手法。

※2 前駆現象：物体の状態が変化しようとする準備段階。

教材用に改良・製作した
コンデンサー搭載型ミニ四駆

「コンデンサー」→



遺伝子解析による 乳がん発症の予測。

大学院医学系研究科 臨床検査・腫瘍学分野 准教授
株式会社ブレーケージェネティクス取締役副社長

末廣 寛 Suehiro Yutaka

Profile

1993年 山口大学医学部医学科 卒業

2001年 同大学大学院医学研究課程修了、博士(医学)

2001年～同大学医学部医学科特殊専門領域腫瘍病態学講座
助手、同大学医学系研究科臨床検査医学分野助手、
同大学院医学系研究科臨床検査・腫瘍学分野
講師などを経て、2011年から現職



GT GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT GAG GTC AGC GAG GTC
GC GTC AAT GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT GAG
C AAT GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT GAG
T GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT
GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT
AGC GTC AAT GGT GAG GTC AAT GGT GAG GTC AGC GTC AAT GGT
GTC AAT GGT GAG TTC
TTC GGT GAG GTC AGC
AGC GTC AAT GAG
GTC AAT GGT
TTC GGT GAG
AGC GTC

予防と早期発見につ 画期的な検査法を

恩師に憧れて研究の道へ

実は、高校時代から遺伝子は苦手分野でした。そんな思いとは裏腹に、大学院で与えられた研究テーマは「がんの遺伝子検査」。たった1枚の小さなDNAチップ^{※1}で、膨大な数の遺伝子情報を一度に解析できること、薬剤や副作用との関連を事前に調べられることに驚きと魅力を感じました。もともと1つのことに熱中しやすい性格のせいか、研究に没頭するうちに、やりがいと面白みを見出せるようになりました。

学生時代は軽音楽部に所属し、トランペットを担当していました。当時、顧問をされていた産婦人科の加藤紘先生が腫瘍マーカーであるSCC抗原を発見され、臨床的に広く利用される検査法を開発されました。私も恩師のように、いつか実用化されるような検査法を開発したい。その夢をかなえたいという思いから、臨床を経て、研究の道へと進みました。

発症リスクを予測する 乳がん検査の新たな道標

乳がんは、国内で年間推定6万人が発症しており、女性のがんのトップを占めています。早期発見で適切な治療を受ければ、9割以上の確率で治癒が期待できるとされています。しかし、マンモグラフィー検査や触診などによる乳がん検診は、「痛い」といったイメージや「恥ずかしい」といった理由から敬遠されがちで、発見が遅れる場合も少なくありません。乳がんを撲滅させるためには、発症リスクを知り、予防に役立つことが必要です。そこで求められているのが、病気になる前の段階でがんになりやすさを知ることができる検査法の確立です。

従来のがん検診は、がんを発症した患者のがん組織、あるいはがんが疑われる部位の組織を検査の対象としていますが、今回新たに開発した検査法は、がんになる前の時期に行う検査であり、対象はがん組織そのものではなく血液細胞中のDNAとなります。

生命の設計図であるDNAは、4つの塩基の配列^{※2}によって描かれています。この配列は全ての人が同じではなく、個人ごとに違っている部分があります。この個人ごとの塩基の配列の違いを「遺伝子多型」^{※3}といいます。多型にはい



いろいろな種類がありますが、個人間における1つの塩基の違いを「1塩基多型」と呼びます。以前は、この1塩基多型と病気や薬の効果などの関連性を調べるために、世界中の研究者がこぞって研究を進めていました。

しかし、2004年からは、遺伝子の配列のコピー数が個人間で異なる「DNAコピー数多型」が注目されるようになりました。これは、先程の1塩基多型とは異なる概念です。それまでは、遺伝子は父親と母親から1つずつ受け継ぐため2個と考えられていましたが、実は、個人によつては1個、あるいは3個など、数が増減する場合があることが分かってきました。

ちょうどその頃、乳がん患者に共通する多型を見つけました。乳がんになりやすさを判定するDNAコピー数多型についてはそれまで知られていなかつたため、最初は解析を間違えたのかとあきらめかけました。しかし、遺伝子解析技術の進歩に伴い、DNAコピー数多型の存在が明らかになったことで、研究が一気に進み、乳がん患者に特徴的なDNAコピー数多型を初めて同定することに成功しました。

研究成果を実用化レベルに

我々が開発した検査法は、乳がんになりやすさに関わる「DNAコピー数多型」を調べることによって、乳がん発症リスクを予測しようとするもので、がん発症の予測診断は世界初となります。この研究テーマが、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の「がん超早期診断・治療機器の総合研究開発プロジェクト」に採択されたことによって、本格的なシステムの実用化に乗り出しました。

本検査では、少量の血液を採取し、PCR法※4

に基づいた簡便で迅速な検出を行うことで、将来、乳がんを発症するかどうかを最大80%の確率で予測します。これまでのDNAチップを使った検査法では、1回の検査に約10万円が必要でしたが、本検査は1万円以下で実現可能です。コストも時間も大幅な削減が見込めます。

乳がんの発症リスクを評価できれば、生活習慣や生活環境の改善を含めた具体的な予防策を講じることができます。現状のがん検診への動機づけにも役立ち、乳がん検診の受診率を向上させることも期待できます。ただし、受診者が必要以上に不安を感じないためには、検査前の十分なカウンセリングが必要です。また、陰性と診断されたからと安心して、検診から遠ざかるのは賢明ではありません。検診・受診の啓蒙も含めた活動の必要性を感じています。

実用化と並行して、下関市や下関医療センターなどの協力を得て、山口県在住の1000人の女性を対象にした検査も行っています。今後20年間かけて追跡調査を行い、発症の確率や予防効果などを調べていく予定です。

遺伝子解析技術を活用した 山大発ベンチャーの設立

検査法を開発しても販売者がいなければ普及しません。そこで、2013年、山口大学発のベンチャー企業「ブラケアジェネティクス」を立ち上げました。

主な事業内容は、個人の体質や生活習慣に応じた、女性向けの健康情報配信サービスです。利用者が自分の唾液を送付すると、解析結果が個人用サイトで閲覧できるという仕組みです。東洋鋼鉄株式会社、および一般財団法人生物科学安全研究所との共同研究により開発した遺伝子解析キットを用いて、高血圧、肥満などに関連する12種類の遺伝子多型を解析し、個人の体質を判定することで、その人に合っ

た健康情報を提供します。

実際に遺伝子検査を担当するのは一般財団法人生物科学安全研究所で、本学はその前段階に当たる技術指導を行っています。今後、山口県在住者を対象にした1000人規模のモニター試験を実施した後、2016年4月から本格的なサービスを開始する予定です。

想いが、未来をつむぐ

医師になれば多くの命を救うことができます。しかし、病状が進行していた場合、助けられないこともあります。病気になってからではなく、病気になる前にできることを実践することで、さらに多くの命を救うことができる。それが研究への大きなモチベーションです。得られた研究成果を広く社会に還元することで、より多くの人々の健康に寄与できると信じています。

地方にいても世界をリードする最先端の研究が展開できます。本学にはそのための施設や設備といった条件が全て整っています。地道に取り組んでいれば、必ず何かが見えてきます。食わず嫌いにならずに、多くの経験を積み、目の前のこと一生懸命取り組んでください。

また、大学は出逢いの場でもあります。尊敬する恩師や仲間を見つけて、その人に一步でも近づけるように努力することも必要です。未来を描くヒントはたくさんあります。皆さん的手で新たな未来が切り拓かれることに大きな期待を寄せています。

※1 解析したい遺伝子の断片を基板に高密度に配置した物。
※2 アデニン(A)、チミン(T)、グアニン(G)、シトシン(C)の4つの物質。

※3 遺伝子を構成するDNA配列の個体差で、集団の1%以上の頻度で発生するもの。

※4 ポリメラーゼ連鎖反応。目的とするDNA断片を短時間で大量に增幅させることができる実験法。

GNAANCTT TTAG GCCA GACTAG ATTTT AG CAGT AAT GT T GTTT CAN ACAT
10 20 30 40 50 60



ミクロとマクロの視点で 燃焼メカニズムを解明。

大学院理工学研究科 教授

三上 真人 Mikami Masato

Profile

1990年 東京大学工学部卒業
1995年～東京大学大学院工学系研究科博士課程
修了、博士(工学)
山口大学工学部助手、講師、助教授を経て、
2009年より教授



COMBUSTION
EXPERIMENT

エンジンの高効率化
噴霧燃焼の現象を

誰も知らない極限を探りたい

小さい頃、アリに砂をかけて観察するのが好きでした(笑)。かける砂が少ないとアリが出てくるし、多いと出てこられない。極限を探ることに夢中でした。振り返ってみると、私の研究者としての原点はここにあるかもしれません。

学生時代は、地上での短時間微小重力環境における液滴燃焼^{※1}の基礎研究に取り組みました。一つの燃料粒が燃え、次の粒に燃え移る燃焼メカニズムについて探っていました。研究者への道を決定づけたのは、大学4年生のとき。それまでは特にこれといった明確な目標を持っていなかったのですが、卒論にとりかかると考えが一変しました。図書館にこもって海外の文献を調べるうちに、当時私が取り組んでいたカプセルの空力試験が、既に1970年代に行われていたことを知り、衝撃を受けました。このことがきっかけで研究に目覚め、大学院のドクターコースに進み、研究者になることを決意しました。活躍の場としては、企業や研究所、大学などが挙げられますが、私は比較的自由度が高い環境で研究できる大学を選びました。

噴霧燃焼メカニズムの解明

私の専門は燃焼工学です。燃焼メカニズムを解明し、エネルギー効率の向上や燃焼機器の改良などに役立てることを目的としています。

航空機のジェットエンジンや自動車のディーゼルエンジンでは、液体燃料を噴射して霧状にし、微粒化された無数の液滴を燃焼させる、噴霧燃焼という方式が用いられています。

噴霧された液体燃料を安定的に連続燃焼させるためには、噴霧火炎基部における燃えている粒から燃えていない粒への火炎の「燃え広がり」、それに続いて噴霧液滴全体が燃焼する「群燃焼」という過程が必要です。

これまでの実験結果から、液滴間の燃え広がりが起きる距離には、限界があることが分かってきました。また、その距離は、複数の液滴の影響を受けて変化し、燃え広がり方向によつても変化することも認められます。しかし、燃え広がりから群燃焼に至るメカニズムについては、未だ十分な解明が進んではいません。

そこで、パーコレーション理論^{※2}を用いて仮



に寄与する

捉える



出典:宇宙航空研究開発機構 (JAXA)

説を立て、火炎の燃え広がりや群燃焼の発生過程を適切に取り扱うことのできるモデルを構築しようとしています。液滴から液滴へ、火炎がどのように燃え移っていくのか、ミクロ的な近場のつながりのルールが分かれば、マクロ的な群燃焼のメカニズムも解明できるものと考えています。パーコレーション理論をベースに、両者を統合することで、新たな燃焼理論を構築できるものと期待しています。

無重力を利用した宇宙実験

通常、エンジン内で噴射される液滴の直径は数十～数百 μm と非常に小さな粒のため、観察を行うには時間が短いのがネックです。実験結果を詳細に観察するためには、1mm程度の大きさの液滴が必要です。そこで問題となるのが、火炎に大きな影響を及ぼす自然対流の存在です。1mm程度の大きな粒を使って再現しようとすると、高温の火炎と空気との温度差が生まれるため、地上の重力環境では、自然対流の発生が避けられません。こうした背景から、国際宇宙ステーション(ISS)の日本実験棟「きぼう」でのGroup Combustion実験が実現しようとしています。この実験は「きぼう」で行われる初めての燃焼科学分野の実験となります。現在、宇宙航空研究開発機構(JAXA)を始めとする関連機関と共同し

て進めています。

今回の宇宙実験では、まず、液滴間の燃え広がりの限界距離と燃え広がりの方向を、少数の液滴群により確認します。次に、その結果を反映させたモデルを、最多152粒の多数の液滴をランダムに分散した液滴群の燃焼によって検証します。それを無重力下で行い、燃え広がりに関する法則を検証します。この実験によって、液滴群の燃え広がりのメカニズムの解明と、噴霧燃焼に関する数値シミュレーションの高度化も可能となります。これまでの液滴燃焼に関する知見と、液滴群燃焼の発生メカニズムとを、理論的に結びつけることができるものと大きな期待を寄せています。

革新的な燃焼技術の開発に貢献

化石燃料の枯渇が叫ばれる中、自動車においては電気への動力シフトが進められています。しかし、化石燃料は重量容積当たりのエネルギー密度が高いため、現実的には2050年頃でも、世界全体で8割近くの自動車は、内燃機関を搭載しているものと予測されています。

実は、自動車のガソリン機関やディーゼル機関の熱効率は30～40%程度で、残りは利用されることなく排出されています。エンジンにおける熱効率を数%高めるだけで、大きなインパクトを与えることが期待できます。

本学は、国家プロジェクトである「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」の「革新的燃焼技術」にテーマ採択されています。これは、日本国内におけるガソリンエンジンとディーゼルエンジンの熱効率を、現状の30～40%から最大50%にまで飛躍的に向上させる革新的な技術開発を目指すものです。我々の研究室は、エンジンメーカーのサポートを受けて、ガソリンとディーゼルの両方のチームに参加しています。研究の成果は、高効率で環境に優しいエンジンの開発に寄与するものと考えています。

自分を信じ、興味の幅を広げよう！

研究の話とは逸れますか、私は、中学生からずつ

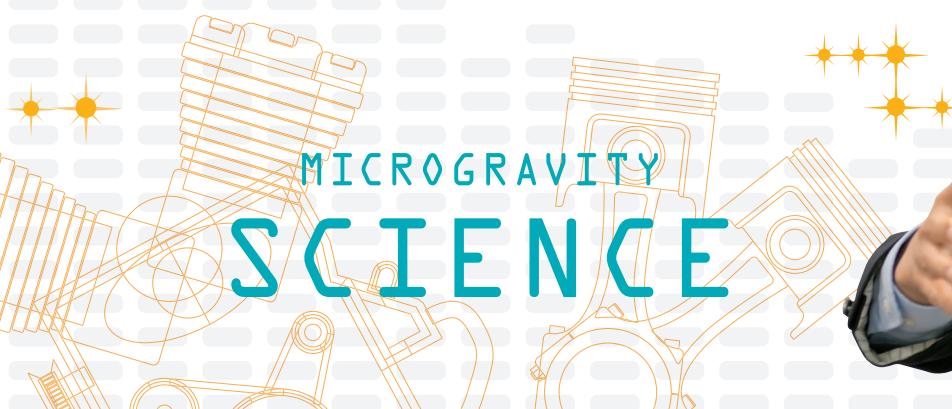
と器械体操を続けていました。始めたきっかけは、バク転ができたら「カッコいい」という単純な発想から。しかし、練習してもなかなか結果は出ませんでした。センスのある周りの友達はどんどんできるようになり、半年で挫折を味わいました。ところが、10年続けるうちに、床で2回宙返りといった難しい技もできるようになったのです。1つのことを諦めずにやり続けたことで、多くのことを学びました。器械体操で得た経験は、研究をする上でも生かされています。10年続ければ何か発見できるかもしれないという自信をもたらしてくれました。もともと運動が得意だったら、そんな感覚は覚えなかつたのかもしれませんね。

私にとって学部生や大学院生は大切な研究パートナーです。彼らは、経験に裏づけされない独自のひらめきや感性を持っており、こちらが思いもよらないような新たな発見につながることがあります。そうした新たな発見への扉を開くためには、興味の幅を広げることが必要です。「自分はこれしかやりません」と言って選択肢を狭めてしまうと、それがダメだった場合に行き詰まってしまう恐れもあります。将来の可能性を広げるためにも、引き出しをたくさん持つておくことが大切だと思います。

貴重な学生時代、今しかできないことはたくさんあります。己を信じ、周りの人を大切にして、あらゆることに貪欲にチャレンジしてください。きっと今まで想像していなかった新たな展開が待っています。ぜひ、山口大学で新しい自分の可能性を見つけてください。

※1 一粒の液体燃料が燃えること。

※2 局所のつながりが全体にどのような影響を与えるのかを対象とした一般的な物理学の理論。自然現象や社会現象など、あらゆる分野で応用されている。



ウイルス感染症の研究。

節足動物媒介性 ウイルス感 染症の研究。

共同獣医学部 獣医学科 獣医微生物学教室 助教

下田 審 Shimoda Hiroshi

Profile

2011年 山口大学農学部獣医学科 卒業
 2014年 山口大学大学院連合獣医学研究科(博士課程)
 　修了。博士(獣医学)
 2013年より現職



国内外における実態 新規ウイルスの分離

留学経験が大きな転機に

両親が英語教室を経営していたため、小さいころから自然に英語に接する環境でした。そこで、本格的に英語を学んでみたいという思いから、単身渡米し、ペンシルベニア州の高校に留学しました。最初は自分の話す英語が通用しなくて苦労しました。言葉のニュアンスを捉えること、言葉の向こうの心を読み取ることなど、多くのことを学びました。失敗をたくさん経験することで、少々のことでは動じない精神的な強さと、自分への自信もつきましたね。

この留学経験は、将来の道を決定づける大きな転機になりました。留学先のホストファミリーがウマやイヌ、ネコなど、たくさんのペットを飼っていたため、毎日たくさんの動物に触れることができました。彼らの世話をするうちに、将来は動物に携わる仕事をしたいと考えるようになりました。そこで帰国後、帰国子女入試を受けて、山口大学農学部獣医学科へ進学しました。3年生の12月から研究室に配属されるのですが、将来関わることがないであろう分野を、今のうちに学んでおこうと考えて、獣医微生物学分野の研究室に入りました。

大学院時代までは臨床獣医になりたいと思っていたのですが、未知のものや新しいことを追い求める研究の魅力にすっかりはまってしまい、研究者の道を選びました。

伴侶動物における 日本脳炎ウイルスの疫学調査

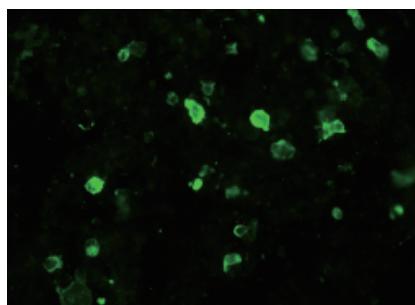
私の専門は節足動物媒介性ウイルスです。これは、蚊やマダニなどの節足動物によって媒介されるウイルスで、日本脳炎やデング熱、ウェストナイル熱など、多くの重篤な疾病を引き起します。記憶に新しいところでは、2013年に山口県で報告されたマダニによる重症熱性血小板減少症候群(SFTS)があります。このほか、日本で報告されているものには、蚊(主にコガタアカイエカ)による日本脳炎があります。

まず、学部生のときに取り組んだのは、全国における日本脳炎ウイルスの蔓延状況の調査です。日本脳炎ウイルスは、ブタの体内で増殖し、蚊(主にコガタアカイエカ)が日本脳炎ウイルスに感染したブタを吸血し、その後ヒトを刺

把握および を目指して

すことによって伝播されます。それまで、ブタの日本脳炎ウイルス抗体保有状況の調査は行われていましたが、私たち人間にとて身近な存在であるイヌで行われた例はありませんでした。そこで、飼育犬における日本脳炎ウイルスの抗体保有状況を調べるために、全国の動物病院で採取されたイヌ652頭の血清を使って調査しました。その結果、イヌの抗体陽性率は25.2%であることが明らかになりました。さらに、イヌによる感染実験も行った結果、発症はないものの、感染は成立していることが確認されました。これによって、日本脳炎ウイルスは人に近い環境でも蔓延していることが示唆されました。

大学院生のときは、獣医科の診療に携わる傍ら、日本脳炎ウイルスの蔓延状況を調査するため、新たな診断法を確立する研究を続けていました。日本脳炎ウイルスに対するモノクローナル抗体※1を作製し、これを用いた抗体および抗原の検出系の確立に取り組みました。その結果、生のウイルスや多量の血清を使用しなくてもさまざまな動物種に適用できる、簡易で有用な調査手法を開発することができました。



モノクローナル抗体を用いた蛍光抗体法によるウイルス感染の確認。

ダニが媒介する 新規ウイルスの遺伝子を検出

現在は、ダニ媒介性のフライウイルス※2に着目し、野生動物およびダニからフライウイルスを検出する疫学的調査※3を行っています。

日本で広範囲に流行が確認されているフライウイルスとしては日本脳炎ウイルスが挙



げられていますが、世界においては複数のフライウイルスの流行が確認されています。そこで、2013年、国内におけるフライウイルスの現状を明らかにするため、野生動物からフライウイルスの遺伝子検出を試みました。その結果、山口県で捕獲されたイノシシから、全く新しいフライウイルスの遺伝子を検出することができました。解析の結果、このウイルス遺伝子は、ダニ媒介性脳炎ウイルス群に属するウイルスであることが明らかになりました。

ダニ媒介性脳炎は、日本脳炎と同じフライウイルス科フライウイルス属のウイルスによって引き起こされる感染症です。これは、マダニによって媒介される人獣共通感染症で、主にロシアやヨーロッパ諸国で問題となっており、毎年1万人前後の患者が報告されています。日本ではダニ媒介性脳炎の存在は知られていませんでしたが、1993年、北海道においてダニ媒介性脳炎の患者が見つかっており、原因ウイルスが分離されています。しかし、その後は報告がありませんでした。

今回の調査は、本州初のダニ媒介性脳炎ウイルス群に属する新規フライウイルスの発見となりました。今後は、本ウイルスの分離を試み、病原性や感染サイクルを含めた国内における動態を詳しく解析していく予定です。

また、ダニ媒介性のフレボウイルス※4にも注目しています。これは、重症熱性血小板減少症候群ウイルス(SFTSV)を含むウイルス属です。現在、アメリカ国立衛生研究所と共同研究を行っており、これまでに6種類の新たなフレボウイルスの遺伝子の検出に成功しています。今後は、ウイルスの分離を試みると同時に、蔓延状況や伝播様式などを調査し、診断方法についても検討していきたいと考えています。

まだ解明されていないウイルスは国内外にたくさん存



在します。環境の変化や国際化に伴い、今後、新興感染症ウイルスが国内に侵入する可能性も考えられます。蔓延状況を把握するために疫学的調査を続けていくと同時に、これまで見つかった新規ウイルスについて分離を試み、病原性の解明やその先の予防対策につなげていきたいと思っています。

動物と人の共生に貢献する

実験にせよ、調査にせよ、毎回、どんな結果が出るかワクワクします。予想に反した結果が新たな発見につながることもあるので面白いですね。

研究の成果は論文に集約されます。そこには、専門分野の有識者による査読が入るため、採択されること自体が研究の価値が認められたことになります。論文や学会発表などを通じて、自身の研究成果が多く人の目に触れるにやりがいを感じています。

獣医師というと「動物のお医者さん」を連想する方が多いかと思いますが、人獣共通感染症の予防や食肉の衛生管理、空港の検疫官など、さまざまな分野で活躍しています。動物だけでなく、人間の健康に寄与することは、獣医師の大切な役割なのです。我々が目指すのは、動物と人間の共生です。“One World, One Health”※5の考え方のもと、動物と人の健康は一つと捉え、人類と動物が共生して生きる社会に貢献できる研究を続けていきたいと考えています。

※1 ある特定のウイルスだけに反応を示す特異的な抗体。

※2 フライウイルス科フライウイルス属に分類されるウイルス。日本脳炎ウイルスやデングウイルス、ウエストナイルウイルスなどを含む。

※3 地域や集団における病気の感染源や感染経路などについて、統計的に調査すること。

※4 ブニヤウイルス科フレボウイルス属に分類されるウイルス。SFTSVウイルス、リフトバレー熱ウイルスなどを含む。

※5 2004年に野生生物保全協会(WSC)が提唱し、国際獣疫事務局(OIE)が追認する考え方。

**未来を変える
知財人材の育成**

国際総合科学部 教授
木村 友久 Kimura Tomohisa

Profile

1978年 早稲田大学法学部法律学科卒業
1978年～ 宮崎相互銀行職員、宮崎県職員、都城工業高等専門学校 教授等を経て
2002年 山口大学メディア基盤センター 教授
2005年 同大学大学院 技術経営研究科 教授
2013年～ 同大学 大学研究推進機構 知的財産センター 副センター長
2015年より現職

法解釈から戦略的 知財教育のスタンダード

Patented

体系的な学びによる 知財教育のモデル化

経済や技術のグローバル化の急速な進展に伴い、企業の海外展開が進んでいます。こうした中、事業成功の鍵を握るのが知的財産(以下、知財)における戦略です。開発者や研究者にとって、活動から生まれた価値ある成果は守られるべき知財です。企業においては、知財を侵害する、あるいは侵害されることによって、存続すら危うい事態を招きかねません。インターネットなどの普及によって、誰でもコンテンツ制作が行えるようになった現在、知財は広く社会に求められている常識ともいえるでしょう。

こうした社会の要請に応えて、山口大学では、全国の大学に先駆けて、平成25年度より知財教育を全学部の1年生を対象に必修化するとともに、学士課程から大学院に至る知財教育カリキュラムの体系化を行っています。

よく1年生を対象にした全学必須の知財科目だけがクローズアップされるのですが、これは単なる入り口に過ぎません。全学必修の入門科目、これに直接接続する選択科目、さらに法学部専門教育レベルの法律系科目という3つのレベルに分けたカリキュラム体系で、学びを体系的に深めていくことができるのが大きな特徴です。おそらく法学部を含めた大学でも、ここまで学ぶ機会を揃えているところはないであろうと考えています。

知財科目的開設と並行して、教材の独自開発も行っています。教材とは、単に授業スライドやビデオ教材といったものではなく、教育研究用の特許検索システムなども含めた広い意味での教材です。

本学の特許検索システム「YUPASS」は、CSV形式で、特許公報内容が取得できるように開発しています。学生が取得コストを気にせずに特許情報を一括取得できる上、授業で150人が同時に検索しても支障が出ないようなシステム設計をしています。また、教員や学生が教育研究に役立てることができるよう、自宅からのアクセスも可能にしています。

文部科学省の平成27年度教育関係共同利用拠点に認定されたことを受け、他大学への展開も始めました。体系化された本学の知財教育、

活用までを含めた 一歩を確立

山口大学国際総合科学部の詳細はここでCHECK! >>> <http://gss.yamaguchi-u.ac.jp/>



独自開発した知財教育の教材とノウハウを用いて、全国の大学においてFD・SD^{※1}を実施することによって、知財教育を全国に普及できるものと期待しています。

実践から理論を振り返る 学びのスパイラル

知財教育は、理論と実践の融合を目指した総合的な学問です。知財法の解釈だけでは実務に応用できる知識を習得できません。ケース・バイ・ケースで判断される実務においては、教科書的な対応では難しいのが現実です。そこで有効となるのがアクティブ・ラーニング^{※2}です。

知財教育を行う上でのアクティブ・ラーニングには2種類あります。一つは、基本的な知識を定着させるためのもの。もう一つは、実務レベルの高度なアクティブ・ラーニングです。

いくつか例を挙げてみましょう。特許法の中に損害賠償額の算定規定という非常に難しい条文があります。簡単に説明すると、特許権侵害行為を受けたとき、損害賠償を請求する際に、相手方が侵害品を販売した個数と、権利者が持っている製品の1個当たりの利益額を掛けることを示したものです。まず、この条文の理解から定着までを行うのが基礎的なアクティブ・ラーニングです。しかし、一言に「利益」といっても、パチンコ店にサンプル品として置いているパチンコ台を個数として利益に入れて良いのかどうかといった発想は、高度なアクティブ・ラーニングを経験しなければ出てきません。

また、ある家電製品の特許を回避して製品のプランニングを行うという課題を出した場合、検討した上で、ある企業はギリギリのラインで特許を回避して製品を開発する、また別の企業はブランドイメージの毀損を避けるために製品を作らないという別々の判断が生まれます。企業のポジションニングによって知財

戦略が異なるため、必ずしも解は1つとは限らないのです。

本学では、このような実例を基に現実的な解を導くアクティブ・ラーニングを行い、理論にフィードバックするという学びのスパイラルを展開することで、法律の解釈から知財戦略までの一貫した知財教育を実現しています。データからも分かるように、その教育

効果は着実に表れています。学生は授業や課外活動においても自主的な学びを展開しており、確かな手応えを感じています。

国際総合科学部における展開

特に、平成27年4月に新設された国際総合科学部の学生には大きな期待を寄せていました。この学部では7つの知財系科目を設定しています。将来、海外での活躍を見据え、世界各地の知的財産法を学ぶ「国際知財戦略論」という科目も組み込んでいます。

英語で展開される授業もあります。さらに、2年次の後期からは、海外留学プログラムを体験します。英語を使えるのは当然のこと、海外の人々に自分の考えを主張できる外向き志向の人材が育成できるものと期待しています。

また、デザイン科学^{※3}に基づき、企業などを連携し、プランニングから始まる実践的な課題解決型学習も組み込んでおり、海外に出て活躍するだけでなく、地域においてもグローバルな視点で課題解決に取り組むことができる人材の育成を目指しています。

クール・ジャパンともてはやされてはいるものの、日本における知財の足回りはまだ貧弱です。良い仕事をしても知財面の課題をクリアしないければ、事業化のときにつぶれてしまう恐れもあります。あらかじめ知財の知識を入れておけば、リスクの軽減につながるはずです。

また、世界には一国だけでは対処できない問題が山のようにあります。世界で戦えるグローバルな人材を養うのが目標ですが、学生の皆さんには単なる金儲けを目的にしてほしくないということをお話しています。国力を上げ、他国を援助するためにも、知財教育が果たす役割は大きいものと信じています。

心の壁を打ち破ろう！

文系、理系という言葉を使うことによって、自分の活動の範囲を精神的に制約してしまってはいませんか？ 理系であろうが、文系であろうが、必要に迫られれば、誰しも自ずと勉強するもの。学生の皆さんには、文系だから、理系だからというステレオタイプの発想はやめ、将来的可能性を広げてほしいと願っています。

また、アマチュアの域を超えた趣味を持つことをお勧めします。セミプロ級の趣味と、自身の専門とを掛け合わせたときに、素晴らしい相乗効果を生み出す可能性があるからです。

最近、気になっているのは全体的に思考が単純化していることです。全体を見て多くの情報を取り入れた上で、自分なりの考えを客観的に組み立てることが苦手な学生が多いような気がします。原因是、視野が狭いこと、実体験が少ないとあるのかもしれません。大学時代は大きな転換期です。目の前のことについて一生懸命取り組んでいれば、進むべき方向は見えてくるはず。学生時代に経験を積み、たくさんのことを見吸収して、総合判断が下せるような見識を身に付けてほしいと思います

※1 FDはFaculty Developmentの略。大学教員の教育能力を高めるための実践的方法。SDはStaff Developmentの略。職員、スタッフ等への職務内容の改善方法。

※2 教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称(文部科学省用語集より)。

※3 認識科学における「あるものの探究」に対して、「あるべきものの探究」を行う学際的な学問。



平成28年度組織再編

新しい山口大学のこれから

「時代と共に」

総務企画担当副学長 古賀 和利

「地域とともに 時代とともに」、これは、現学長のもと、山口大学の今を端的に示す言葉として用いています。

平成 27 年度の国際総合科学部設置、教育学部・経済学部の改組、平成 28 年度の人文学部・人文科学研究科改組、教職大学院の設置は、昨今メディア等で話題となっている人文社会系の在り方に関する山口大学としての一定の結論だと考えています。

一方、理系では、理工学研究科を創成科学研究科へと再編し、理・工・農の 6 年一貫教育を実現するとともに、知財教育、イノベーション教育を通してグローバルな理工系人材の育成を目指します。これらの組織改革を通じ、地域社会で、あるいは国際社会での山口大学のプレゼンスを拡大していくことが我われ大学人の使命だと思っています。



人文学部・人文科学研究科

改組後の各コースの専門分野の詳細はコチラ >>>
<http://www.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/>

人文学部及び人文科学研究科の一体的な改革を目指します。

人文社会学科及び言語文化学科の 2 学科から、人文学科 1 学科に改組します。

改組後の人文学部人文学科では、現在と未来をよりよく生きるための観察を発見・創造する役割を担うとともに、それらを現実社会で実践することを可能とする人間力と社会人基礎力を有する人材を養成することを目的として、学士教育課程を展開します。

人文学部で学べる多彩な分野に触れ、3 年次から進むコースを探してください。

学科	コース	専門分野
人文学科 (185名)	哲学コース	西洋哲学、東洋思想史、美学・美術史、宗教学
	歴史学コース	日本史、東洋史、西洋史、考古学
	社会学コース	現代社会学、社会心理学、民俗学・文化人類学
	日本・中国言語文学コース	日本語学、日本文学、中国語学、中国文学
	欧米言語文学コース	英語学、英米文学、ヨーロッパ語学・比較言語学、ヨーロッパ文学・比較文学、言語学

改組後（平成 28 年度から） *学生は、3 年次より各コースに分かれます。

人文科学研究科では、現在の地域文化専攻及び言語文化専攻の 2 専攻から、人文科学専攻 1 専攻に改組します。

改組後の人文学部人文学科では、現代文明が抱える諸問題を明確に捉え、その解決に貢献できる人材を養成するため、「人文科学全般を広い視野にいながら、専門分野の研究をさらに深化させ、高度専門職業人を育てる」という理念を根幹とし、「人間文化の根本原理を探求し、その多様な展開について、思想、歴史、現代社会、日本・中国言語文学、欧米言語文学の各分野において深く解明する人を育成」するという目標を掲げて、修士教育課程を展開します。

教育学研究科

改組後の各コースの専門分野の詳細はコチラ ➤
<http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/>

新たな専攻として教職実践高度化専攻(教職大学院)を設置します。

このたびの新専攻(教職大学院)の設置は、学校現場における今日的課題である子どもたちの抱える諸問題並びに学校経営に係る諸課題に関して、理論的・実践的に高度な専門能力を有し、校内や地域において指導的役割を担い得る教員の養成を目的としています。

教育学研究科の改組内容

改組後(平成28年度から)

【専攻】 【定員】

<修士課程>

学校教育専攻 10名

教科教育専攻 17名

<専門職学位課程>

教職実践高度化専攻 14名

※教育学研究科は、現在の学校教育専攻及び教科教育専攻の2専攻に教職実践高度化専攻を加えた3専攻に改組します。

各コースの養成する人材(教員)像

「学校経営コース」<現職教員院生対象>

学校及び地域における教育諸課題に対し、組織的・経営的視座に立って取り組む高度教育実践力を有する教員(マネジメントリーダー)の養成

「教育実践開発コース」<学部卒院生中心>

卓越した実践的指導力を有し、学校内や地域における教育実践や協働的な研修活動を創造・牽引する力を有する若手教員(教育実践ニューリーダー)の養成

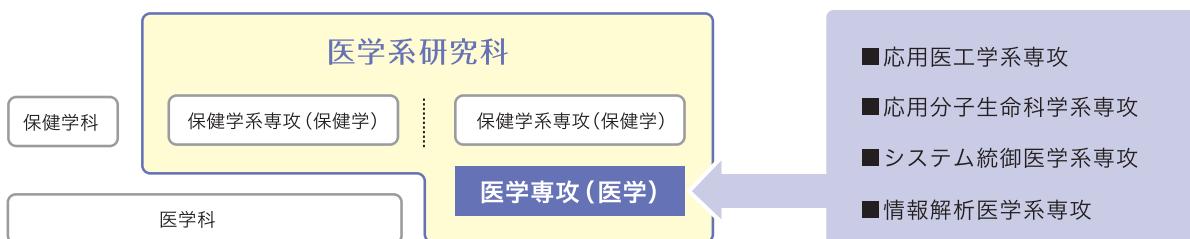
この2つのコースは連携し、より深く問題解決に対応します。

医学系研究科

改組後の各コースの専門分野の詳細はコチラ ➤
<http://www.med.yamaguchi-u.ac.jp/>

4つの専攻を医学専攻(医学博士課程)の1専攻に統合します。

先端的で特色ある研究を推進し、新たな医療技術の開発や医療水準の向上を目指すとともに、知的財産に関する知識及びトランスレーショナルリサーチの能力を身につけ、自らの研究成果を実用化まで発展させることができる人材を養成します。



創成科学研究科

改組後の各コースの専門分野の詳細はコチラ ➤
<http://www.gsti.yamaguchi-u.ac.jp/>

理・工・農学系専攻を統合した「創成科学研究科」を新設します。

伝承と挑戦からイノベーションを創成します。

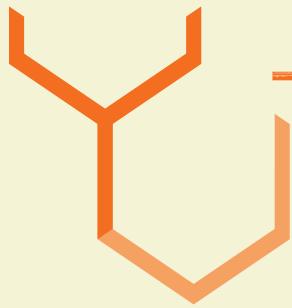
科学技術に関する高度な知識と課題解決能力をもって現代的諸課題の解決に取り組むとともに、高度な専門知識と技術経営の知識を生かしてイノベーションの創出や進展を担うことで社会の発展に貢献できる研究者・高度専門職業人を育成します。

6年一貫教育の推進

理・工・農学系分野の博士前期課程への高い進学状況と現状を踏まえ、学士課程と博士前期課程の接続性に配慮した学科及び専攻の編成とし、学生及び社会から見たキャリアパスの明確化を図るとともに、先取り履修制度による6年一貫教育を推進します。また、博士後期課程では、学問体系を横断した新しい学際分野の研究を促進する分野の融合を目指します。

研究科共通科目

創成科学研究科の教育課程には、理・工・農学系分野の研究者及び高度専門職業人として必要とされる能力を身につけることを目的とした研究科共通科目を開設します。研究科共通科目は、研究基盤科、キャリア教育科目、イノベーション教育科目から構成され、新設される大学院教育センターが中心となって提供する大学共通科目です。



- PRSS

《 学生スタッフYU-PRSSがお届けする、山大の最新情報 》

YU-PRSSとは? ユープラス

広報誌「YU-INFORMATION」や、
山大のWEBサイト内の「キャンパス
ライフ」ページなどの制作に携わる、
山口大学広報学生スタッフです。

YU-PRSS("Yamaguchi University Public Relations Student Staff"の略)は、「山大生のあなた(YOU)にも、そうでないあなた(YOU)にもプラスになる情報を届けたい」との想いを込めてつけられました。現在25名のメンバーで広報活動を行っています。



YU-PRSSメンバー

中富 真奈	原田 海沙	木村 将也
長岡 真大	横山 侑里	徐 瞳美
倉増 沙和	浅沼 萌	房野 仁美
田里 翔太	近藤 守	北山 育実
武田 一志	佐能 潤子	鳥田 苑実
小形 智樹	伊藤 姫花	家永 美穂絵
中山 拳太郎	大賀 新	佐藤 加奈
篠田 侑果	中矢 早映	
高松 安奈	宮地 弘子	

感想、取材依頼など、YU-PRSSに
お気軽にメールしてください!

今月号についての感想や、今後こういった特集はどうだろうといったアイデア、こんな人を取材してほしいといったご要望も受け付けています。また、「私たちを取材してほしい」といったサークルやグループも大歓迎です。たくさんのメールをお待ちしています。

E-MAIL: campus@yamaguchi-u.ac.jp

「キャンパスライフ」はコチラをCHECK! >
http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~campus/campus_life%20_web/

01 第3回山口大学ホームカミングデー開催

10月3日(土)、吉田キャンパスにおいて第3回ホームカミングデーが行われました。今年は創基200周年という記念すべき年であり、今年の4月に新しく創設された国際総合科学部による設置記念式典や英語のプレゼンも同時に開催され、200年という節目に相応しいホームカミングデーとなりました。当日は天候にも恵まれ、学部や学生主催の企画、キャンバスツアー、山口大学ゆかりの地を巡るバスツアー、抽選会などたくさんの催しに卒業生や一般の方、本学の学生・教職員も皆さん楽しまれています。



02 サイエンスワールド2015を開催

10月18日(日)、吉田キャンパスにおいて「サイエンスワールド2015」が開催されました。本学理学部の主催により毎年開催されており、今年は、「科学の面白さを体験してもらおう」といったテーマのもと開かれました。当日は地域の子ども達を中心に約1,200人の来場があり、大変盛況となりました。会場には研究室を巡ってミステリーに出会おうという「ミステリーツアー」、また地域の高校生らによる研究発表大会「サイエンスセッションU-18」など、興味深いイベントが沢山あり、参加者はみな工作や実験を行いながら科学の面白さを体験していました。科学の幅広い分野から様々な出展があり、学びの多い一日となりました。



03 3キャンパスで大学祭開催

11月1日(日)、吉田キャンパスにおいて第66回姫山祭が行われました。今年は創基200周年の記念の年でもあり、200年目の「ありがとう」～姫山より愛をこめて～をスローガンに特別な姫山祭を開催しました。毎年恒例のふく鍋奉行は先着300名に無料でふく鍋が振る舞われ、ミニステージでは来場者参加型の企画が開催され山口大学マスコットキャラクターのヤマミイが絵心グランプリの審査を飛び入りで参加したりと賑わいました。

YU-INFORMATION

ワイユーインフォメーション
山口大学広報誌 Vol.125

山口大学総務部広報課
〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
TEL:083-933-5007 FAX:083-933-5013
E-MAIL:sh011@yamaguchi-u.ac.jp
URL:<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>



姫山祭 吉田キャンパス

また、11月7日(土)、8日(日)の2日間にわたって小串キャンパスにおいて、第71回医学祭が行われました。今年は良いにくの天候にも関わらず、多くの方の来場があり、各部活が出店する模擬店や学生バンドLIVE、bingo大会など、子どもから大人まで楽しめる企画が多くありました。さらには今年はゲストに、人気アーティストの出演もあり、大変盛り上がりました。

医学祭 小串キャンパス

常盤キャンパスでは、11月14日(土)に、「煌～SHINE YOUR LIGHT」をテーマとして第66回常盤祭が開催されました。ステージ企画でのパフォーマンスや、クイズ、bingo大会などが行われ、午後からはゲストライブによる生演奏、ダンスパフォーマンスもあり、盛り上がりを見せました。また、研究室やサークルによる日ごろの研究の成果を発揮した展示や宝探し、模擬店販売など、見所満載でした！



常盤祭 常盤キャンパス

04 創基200周年記念第62回学長杯 駅伝大会



11月14日(土)、吉田キャンパスにおいて、毎年恒例の学長杯駅伝大会が開催されました。学長杯駅伝大会はキャンパス内に設置された特設コースを走る駅伝大会で、62回目となった今回は、山口大学創基200周年を記念して、学生のみならず教職員も参加できる「創基200周年記念の部」が創設され、

部活が出場する「男子の部」と合わせて計17チームが出場しました。当日は小雨が降る厳しいコンディションとなりましたが、一本の櫻を繋ぐため、各選手とも一生懸命に走っていました。また、山口大学マスコットキャラクターの「ヤマミイ」も応援に駆け付け、会場を盛り上げていました。今大会は、学生、教職員が一体となり楽しむことできた良い大会となりました。

編集発行/山口大学広報委員会

古賀和利(副学長 総務企画担当) / Alam,Djumali(人文学部) / 森下徹(教育学部) / 柏木芳美(経済学部) / 坂口有人(理学部) / 玉田耕治(医学部) / 堀宏守(工学部) / 井内良仁(農学部) / 水野拓也(共同獣医学部) / 向山尚志(技術経営研究科) / 小川仁志(国際総合科学部) / 多多聞(大学教育機構) / 田口岳志(大学研究推進機構) / 小河原加久治(大学情報機構) / 中尾淑乃(総務部広報課)

企画・編集・撮影・デザイン/株式会社 無限

EVENTSCHEDULE

12 December

01 火

推薦入試Ⅰ・帰国生徒入試・社会人入試

15 火

推薦入試Ⅰ・帰国生徒入試・社会人入試合格発表

26 土

冬季休業開始(～1/5)

1 January

21 木

推薦入試Ⅱ

2 February

08 月

推薦入試Ⅱ合格発表

25 木

一般入試(前期日程)・私費外国人留学生入試(経済・工学部を除く)(～26日)

3 March

07 月

一般入試(前期日程)・私費外国人留学生入試(経済・工学部を除く)合格発表

12 土

一般入試(後期日程)(～13日)

17 木

大学院学位記授与式

20 日

一般入試(後期日程)合格発表

22 火

大学卒業式／大学院修了式



2015年、山口大学は創基200周年を迎えました

山口大学は、長州藩士・上田鳳陽により創設された「山口講堂」をルーツとし、明治・大正期の学制を経て、1949年に地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設され、2015年(平成27年)、創基200周年を迎えた。山口大学は、地域に根ざした大学として、さらなる充実と飛躍を期し、次なる200年をより意義なものにするための記念事業を計画しています。

山口大学では、200年の歴史を多くの皆様に伝えるための講演会、シンポジウム、また、地域のニーズに合わせた様々な行事、学生の企画によるイベント等の各種記念事業などを実施しています。ここでは、それら創基200周年に関連した最新ニュースを紹介します。



山口大学創基200周年記念 第6回基幹シンポジウムを開催

10月24日(土)、山口大学工学部常盤キャンパスにおいて、山口大学創基200周年記念 第6回基幹シンポジウム「『志』つなぎ 伝える 二百年」を開催し、一般市民、卒業生、教職員、在学生等134人が参加しました。

今回のシンポジウムは、9月に行った第5回基幹シンポジウムにつづき、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」などの制作に携わる方を講師に迎え、制作エピソードとともに山口大学創基200周年の歴史とその時代背景を振り返ることを目的に開催しました。



シンポジウムは岡正朗学長の開会挨拶に始まり、続いて田中和広理事・副学長(創基200周年記念事業担当)が、「創生期の山口大学と明治維新」と題して、山口大学の前身のひとつである山口明倫館で兵学寮教授を務めた大村益次郎の足跡を中心に、山口大学創生期の歴史をたどる基調講演を行いました。

その後、NHKドラマ番組部チーフ・プロデューサーの土屋勝裕氏による特別講演「大河ドラマ『花燃ゆ』の志」を行いました。特別講演では、今回の大河ドラマの企画コンセプトやその背景、山口県の歴史について、制作者の想いや撮影時のエピソードなどを交えながら紹介され、参加者は熱心に耳を傾けていました。

参加者からは、「維新を思い起こす良い機会になった。」等の感想があり、山口大学の200年のあゆみを地域の皆様と振り返る有意義な機会となりました。

「大河ドラマ『花燃ゆ』の世界 in 山口大学」を開催



11月8日(土)、山口大学吉田キャンパスにおいて、「大河ドラマ『花燃ゆ』の世界in山口大学」を開催しました。

この企画は、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の出演者と制作統括をお迎えし、衣装・言葉・所作や大河ドラマならではの演技のこだわりなど、制作の舞台裏をお話いただくことで、学生の幅広い知識、教養の向上に資すること目的に、NHK山口放送局と山口大学が共催で行いました。

イベントは、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」毛利安子(銀姫)役の田中麗奈さんと、NHK制作統括の小松昌代さんをゲストに迎え、トークショー形式で行いました。

会の冒頭、華やかな着物姿で登場した田中麗奈さんの姿に、会場は大きな拍手に包まれました。その後、NHK山口放送局の松苗竜太郎アナウンサーの進行のもと、ドラマの映像や登場人物の相関図などを振り返りながら、田中さんの役柄に対する想いや撮影当時の様子、共演者とのエピソードなどが語られ、参加した225人の学生、教職員関係者は熱心に耳を傾けていました。



後半には学生が田中麗奈さんへ直接質問する時間が設けられ、普段は聞くことのできないNHK大河ドラマ制作の世界に触れることが出来る貴重な機会となりました。